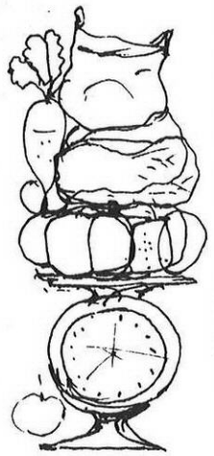
―第一線の人びと

計量の秩序をみまもる

―計量検定職員の仕事―

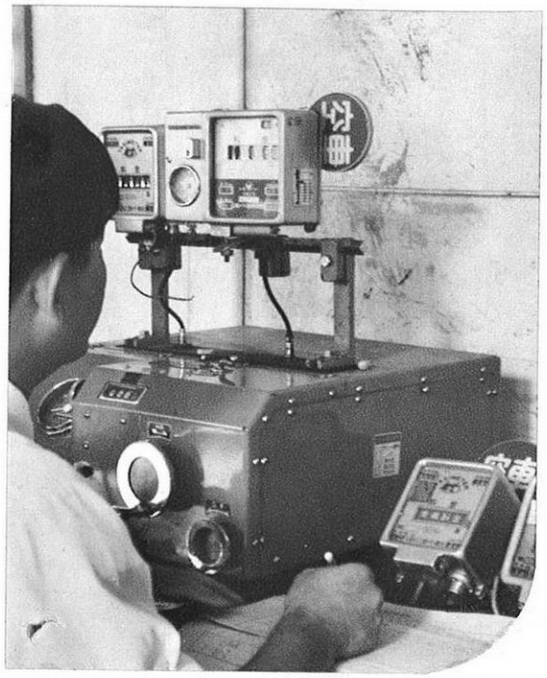
小売店の店頭で、製造工場の生産過程で、あるいは、タクシーや水道のメーターや、血圧計などといった医療器具など、計量器は、あらゆる分野に働いている。したがって、このように経済と密着した計量器を正しく保つことは、何よりも経済の秩序を守るための大原則となるわけだ。

そして、ふえていく計量器を絶えず見まもり続けるのが計量検定職員なのである。

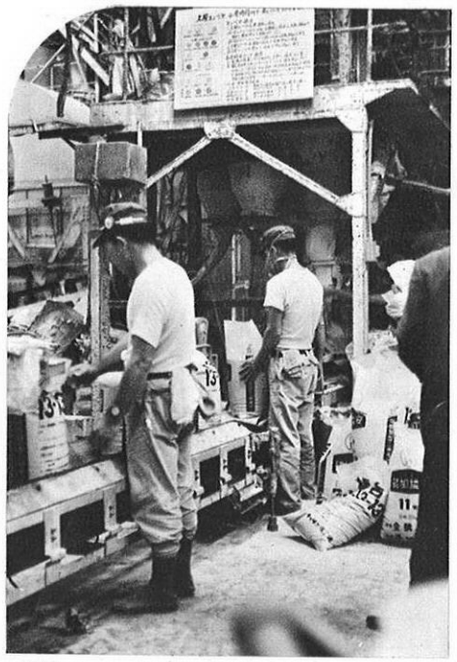


買物シーズンには、デパートの店頭指導も

わずかの誤差もゆるされぬ。緊張した眼差し



車の増加で、タクシーメーターの検査も大多忙



貸袋の工程にも計量器が働いている

流体計測用のメーターについて説明をきく

＜第一線の人々＞

計量検定職員

生活のなかの計量器

現在、私たちの日常生活には、数多くの計量器が使用されている。定規、物差しの類や、台所の台秤などは、大ていの家庭にもあろうし、少なくとも商品を販売しようとする商店なら、計量器は、これはもう絶対に欠かせない道具である。

また、計量器の種類形式にしても、固体、液体、気体を計るもの、〇・一㌘以下の単位の微量てんびんから、トラックや貨車ごと計ってしまう巨大なスケールまで、まさに千差万別である。

小売店で物を計ってもらって買い物をする場合、正しい計量がなされるのはもちろんだが、最近、加工食品類が非常にふえて、たいていのものなら、きれいに包装して売ってある。この場合、品質と量目とがはっきり表示してあるわけだが、こうした製品を、工場で生産する段階に、分量を正しく計る計量器が働いているはずである。

経済の秩序をまもる

商業用の計量器は、計量法によって、規制が行なわれる。計量器の製造、修理業を営業するには、通産大臣、知事の認可が必要であり、商取り引きや、公けの証明に使用する計量器は、検定をうけて、はじめて使用できる。

検定は、種類や、構造が正しく、計量の目盛りが正確かどうかを厳しくテストし、合格したものに限り検定証が交付されることになっている。また、使用中の計量器は、都市では年に一回、山間部では三年に一回の定期検査が行なわれるほか、随時、立入り検査も行なわれる。

これは、いうまでもなく計量が、正しく行なわれて、経済秩序が乱されるようなことのないようにというものである。

責任感という〝重さ〟

熊本県計量検定所では、現在、一〇名の人員で、こうした検定、検査、指導などの業務にあたっている。

検定、検査ともに、所内で行なうものと、現場へ出かけて行なうものとがある。

「検定、検査ともに、やればきりがない位にあるのですが、いまのところ、現員と現施設の限度いっぱいで、フルに仕事をしているといったところです。」確かに急激な経済の発展をみせる現代は、計量機器の増加、複雑化、あるいは大型化をみており、検定所第一線の職員は連日多忙というところ。

大型化といえば、最近、トラックごと重量を計る、トラックスケールなどが、一五㌧、二〇㌧と大きくなってきている。この道一〇年というベテランのT主任は、

「やはりこれだけの大きなものの検定となると、永年の経験が必要なようです。よほど慣れないとまる一日もかかってしまうし、何よりも、検定するという責任感が、文字通り〝重み〟になる。」という。目盛りを読む眼の真剣さも、さこそと思われる。ちなみに、この一五㌧のはかりの誤差は一〇〇㌘単位程度だという。

消費生活に関係の深い割に、私たちは計量器についての関心はさほどでもないのではあるまいか。見えない所で、経済のルールを正している計量検定員の仕事も含めて、私たちは、もっと計量についての認識を高めたいものである。

タクシーのメーター、ガソリンスタンドのメーターそれに体重計や、血圧測定器などといった医療器具に、計量の誤差があっては困る。

高圧ガスのメーターが間違っていたら、人命にかかわる問題となる。

こうみてくると、私たちの日常生活のなかで、計量器がもはや切っても切れない密接なものであることがわかる。

＜メモ＞

計量の歴史

長さ、重さ、大きさをはかる――度量衡について、人類が試みをもった歴史は古い。エジプトの壁画に精巧なてんびんを、紀元前三千年の遺物のなかに分銅を、発見することができる。

我が国で、いつ頃から使われはじめたかは、あまりはっきりしないらしいが、記録にあらわれたのでは、崇峻天皇の頃、呉の国から持ち込まれたというものが最も古いとされている。その後、文武天皇の大宝令（七〇一年）で、度量衡が制度化されている。以来、和銅年間の改制や、江戸時代の改制などが行なわれこそしたが、千二百年の間、そのままの、尺寸、升合、貫匁の、所謂尺貫法による計量が行なわれ続けてきたわけである。

ところで、江戸時代に、江戸と京都に「秤座」が置かれている。これは、はかりとおもりの製作、修理や、取締りを行なったり各地域や寺院など、それぞれ独自な度量衡をきめているものの統一をしたりしていたものである。さしずめ、いまの計量検定所の起りといえようか。